

# 看護学生の職業倫理の涵養にロールモデルは有効か

— 学生の捉えるロールモデルから —

*Nursing students' perceptions of role models: a focus group interview analysis*

中嶋 尚子<sup>1</sup>

Naoko NAKAJIMA

鈴木真理子<sup>1</sup>

Mariko SUZUKI

吉岡 恵<sup>1</sup>

Megumi YOSHIOKA

田中 高政<sup>1</sup>

Takamasa TANAKA

宮崎 紀枝<sup>1</sup>

Toshie MIYAZAKI

宮原 香里<sup>1</sup>

Kaori MIYAHARA

雨宮多喜子<sup>1</sup>

Takiko AMEMIYA

小西恵美子<sup>1</sup>

Emiko KONISHI

キーワード：ロールモデル、職業倫理教育、看護学生、状況倫理

Key words : role model, professional ethics education, nursing students, situation ethics

現代の看護学生がロールモデルをどのように捉えているか探索し、職業倫理教育におけるロールモデルの有効性を検討した。「GoodWork®Toolkit」の中のロールモデルを考える事例を題材に、看護系大学3年生6名のグループ対話の内容を分析した。その結果、学生は生涯特定の人を師とすることには理解を示さず、教師や両親のような自分の可能性を信じる身近な支援者を尊敬の対象としていた。また学生は身近な人の行動を実感することによってその正しさを判断していた。結果から、今後の職業倫理教育の可能性として、学生が状況の現実の中に浸ることのできる状況倫理が示唆された。

This study, using the GoodWork®Toolkit, explored the impression of role models for today's nursing students and discussed the effectiveness of role models to develop professional ethics education. Six students discussed a case that asked students to think about influential people who serve as models for good work. Students did not indicate their understanding in having a particular person as their role or mentor. Rather, the students respected their supporters, such as their parents or school teachers, who they believed to help them develop their potentiality. Students thought about what was right or wrong from observing people who were close to them. For professional ethics education, the findings suggested the possibility of situation ethics exposing students more to the realities of the situations.

## I. 緒言

「人の振り見て我が振り直せ」と言われるように、良きにつけ悪きにつけ、人が学ぶ時に他者を手本とすることはよく知られている。特に、職業教育においてその意味するところは大きい。例えば大工の子は、大工である父親の仕事の間近に見て育ち、

ある年齢に達すれば父親を師匠とし、生活の中で大工という職能を身につける徒弟制度がある (p.1-2)<sup>1</sup>。生活の中で仕事を覚えることは、職能の「型」だけではなく、共に暮らす師匠がもつ職人としての職業倫理観を同時に受け継ぐことを意味していた (p.217)<sup>2</sup>。しかし近代学校制度によって、子どもが自分の親と同じ職業に就かなければならない社会的制約はなく

1 佐久大学看護学部 School of Nursing, Saku University

なり、生活と仕事が分離し、専門学校や職業訓練所が職業教育の役割を担うようになった。ところが従来のような師匠がいない学校における職業教育では、人間が生存するための「型」を修得することができず、自分が何をするのか分からないモラトリアムの若者を多く作り出しているとの意見もある(p.4-5)<sup>1</sup>。

看護基礎教育について概観すると、かつて全寮制の専門学校では、将来病院に就職する職業人として、先輩や教員と生活を共にし、現場で実習しながら職業倫理観を身につけていた<sup>3</sup>。しかし、教育の中心が通学制の専門学校、さらには4年制大学に移行するに伴い、学生は教員や先輩看護師を職業倫理観の「師匠」として認識しにくくなった。また、4年制大学卒業者として看護師以外の職を選択することも可能となり、看護学を学ぶことと、職業として看護師を選択することとは必ずしも直結しない状況になりつつある。

かかる状況と前後して、1980年代以降、ヒューマンサービス分野における職業倫理への関心は急速に高まり、特に、いままで準専門職扱いを受けてきた看護師、心理カウンセラー等が自らの専門職のアイデンティティを問い、職業倫理の確立に向けて内発的に動機づけられるようになった<sup>4</sup>。職業倫理とは、専門的職業に就く人が自ら定め、遵守すべき行動規則であり、個々の専門職業人の道德規準、専門職集団の提供するサービスの内容を改善する指針<sup>5</sup>でもある。日本看護協会も1988年に「看護婦の倫理規定」を示し、2003年にその改訂版となる「看護者の倫理綱領」を公表するに至っている<sup>6</sup>。

このような状況の中、金沢<sup>7</sup>は、現実場面での行動力・判断力の涵養が職業倫理教育の目的であると述べ、専門職が自ら定めた倫理綱領が実際の行動に結びつかないと意味がないと指摘している。この、看護師の倫理的能力の行動的側面を促進する教育・学習の方略のひとつとしてロールモデルの活用が脚光を浴びている(p.188-189)<sup>8</sup>。平成14年の看護学教育の在り方に関する検討会報告書<sup>9</sup>においても、臨地実習における卓越した看護職者が良い影響、すなわち、困難に打ち勝ち良い仕事をする<sup>10</sup>、小さなことにも注意を向け、他者の存在を肯定する等のケアリング行動<sup>11</sup>をとることをロールモデルの効用として挙げている。

一方で、太田<sup>12</sup>は、国内の文献を精査した結果、看護教育におけるロールモデルは、学習者に

とって誰をロールモデルにするかという自由が必ずしも保障されておらず、社会における一般的なロールモデルの捉え方よりも狭い範囲の存在になっていると指摘した上で、伝統芸道的な教育観に基づくロールモデルではなく、状況を体験することによって育まれる知を共有する必要性があると述べている。職業倫理教育におけるロールモデルの有効性は、専門職が自ら定めた倫理規則が現実現場での行動に結びつくかどうかという点が重要であると考えられるが、ロールモデルが厳密にどのように教育的になりうるかという疑問に対する倫理的アプローチからの答は出ていない(p.202)<sup>8</sup>。

いずれにしても、これまでのロールモデルに関する議論は教育側の視点であって、看護教育を受けている学生の視点で論じたものは皆無である。しかも、教育を受ける側の学生は(いつの時代でもそうであるが)、従来の教育手法が必ずしも有効であるかどうかわからない新しい世代背景をもつ若者が大多数である。本研究の目的は、現代の看護学生(以下、学生)がロールモデルをどのように捉えるのか明らかにし、職業倫理教育におけるロールモデルの有効性を検討することである。

## II. 研究方法

### 1. 研究対象および募集方法

研究対象は、看護系大学に所属する学生とした。募集は、大学内に掲示したポスターにより行なった。ポスターには研究の主旨、スケジュール、研究者の連絡先を明示し、研究への参加の有無や中途離脱等は学業成績に全く影響しないことを明記した。ポスターにより参加を希望してきた学生には、直接書面を用いて説明した上で再度、参加の意思を確認した。応募してきた3年生6名が研究参加者となった。調査時期は、学生の負担を考慮し、試験や実習期間を避けて実施した。

### 2. データ収集方法

研究参加者同士のグループ対話における発言を本研究におけるデータとした。グループ対話に先立って、学生には「GoodWork®Toolkit」<sup>13</sup>のロールモデルに関する物語を提示し、①心の師や反面教師の存在、②主人公の「師」の意味、③実際にいない師に対する考え、④学生の家族と自らの進路との関係について考えてきてもらうようにした。グループ対話は、研究者をファシリテーターとして約90分実施した。

「GoodWork®Toolkit」(「よい仕事ツールキット」、以下、ツールキットと略記)とは、1995年に米国ハーバード大学等の研究チーム「GoodWork®Project」<sup>10</sup>が、良い仕事のための個人的方略に関する専門職意識の高い若者への聞き取り調査から開発したものである。良い仕事について導出された5つの影響因子に関連する物語から、仕事の目標や責任、卓越性等について、学生の思考を促すものとなっており<sup>13</sup>、今回使用した「ロールモデル」に関する物語もそのひとつである。本研究で使用するにあたり、開発者の許可を得て物語を邦訳し、状況が日本にフィットするように一部を編集した。研究参加者に提示した物語の大筋は次のとおりである。

若き環境ウィルス学者のノアは大学院生である。突然起こった父の死を受け止められず自暴自棄、薬物依存になり、大学卒業まで12年かかった。彼の心の師は、「自分の可能性を信じる精神」「限界はない」という考えをもつ今は亡きシュバイツァー博士である。自分のような問題学生に対して、博士が自分にしてくれたように、自身が健全な手本を示し、将来は国境なき医師団で働きたいと考えている。

### 3. 分析方法

まず、対話の内容は研究参加者の了解を得て録音し、個人名を匿名化して逐語録を作成した。分析は、①逐語録にそって各メンバーがconventional content analysis<sup>14</sup>によって内容分析を実施、②分析会議を開き、各メンバーの分析結果について討議し、③その内容を録音し、分析逐語録を作成、④第一著者が再度、対話逐語録と分析逐語録を何度も読み返して分析を精練するという手順で行なった。その後、研究メンバーで分析結果の信頼性と妥当性を検討した上で、職業倫理教育におけるロールモデルの有効性について討議した。

conventional content analysisを利用した理由は、学生の捉えるロールモデルに関する研究はもとより、その理論的枠組、構成概念が未知であるため、予想されるカテゴリーや理論的見方なしで、研究参加者から直接情報を得ることに強みをもつ分析手法<sup>14</sup>を選択した結果である。

### 4. 倫理的配慮

上述した事項に加え、研究参加者が不利益を被らないよう研究の各プロセスにおいて細心の注意を払った。なお、データ収集に先立ち、本研究計画に

ついて研究者の所属する大学の研究倫理委員会の審査を受け、承認された計画を遵守した。

## III. 結果

分析の結果、学生の捉えるロールモデルに関して以下のような事項が抽出された。

### 1. 自分に影響を与えるのは、実際に体験したこと、実際に会った人物

この物語の主人公は、シュバイツァー博士という伝記上の人物に、自分の針路や物事に対する姿勢について影響を受けている。このような影響について、研究参加者は以下のように語っている。

「伝記シリーズってあって、読んだことはあって、ヘレンケラーとか、野口英世とか、最初はすごい人なんだなって思っただけです。」

「あ、自分ってこういうのが向いているのかもしれないなっていう、例えば高校とか、中学とか、小学校とか、身体的に障害をもった人とか、接しているうちに、自分の体験からいいなって、その自分がなりたい職業っていうのが出てきたっていうことです。」

これらの発言には、伝記上の人物について一定の評価を行ないながらも、自分の人生に及ぼす影響はほとんどないということが見て取れる。ましてや看護師という職業を選択する契機については、伝記上の人物ではなく、身体障害者との関わりなどの、自分の体験が影響していたということであり、この物語の主人公に対する共感はあまり得られていない。その主人公に関しては、以下のような発言がみられた。

「会ったことのない人を、心の師としてっていうのは、その人を実際に見たことがないから、10倍にも100倍にも良く考えることができます。」

「入り過ぎちゃって怖い。良い意味で師であればいいんですけど、変な意味でとらえていたりとか、そこで道を外していても、(身近な人なら)そこでアドバイスかなんか入るじゃないですか。でも現実にはないってことは、ただ単に自分が思い続けてっていうのだから、良い面もあるし、何かちょっと怖い。」

研究参加者は、実際そばにいて適宜アドバイスをもらえるような人物に関心が向いており、困難に直面したときに心の師の声に耳を傾けるのは、結局自分の想像の産物に過ぎないという事実を踏まえ、本



当にそれでいいのかという確証がもてない様子が窺える。

## 2. 身近な人から理解される人物

ロールモデルは、自分だけでなく、周囲からも認められ、理解される人物であることが望ましいと考えている象徴的な発言を以下に示す。

「1人のことを思い続けるっていうのはいいけど、他人から理解できなかつたり、それが例えば病気って思われちゃったりとか、自分は病気じゃないのに、『何でそんなにいない人のことを思えるの?』とか、そういう風に……」

## 3. 単数より複数

ロールモデルを単一の人物で賄うことへの懸念を表出した以下のような発言があった。

「主人公みたいになりたくない。ある一定の方向しか見えないから。それだと自分が間違っているとも分からないし、できれば多方面も見ればいいかな。そうしないと本当に自分がやっていることが相手に合っているのか、それとも自分だけの気持ちで、相手は余計なことをしているっていう風に考えるっていうこともある」

また、ロールモデルを複数もつことで、適宜それらを組み合わせていくという発言も見られた。

「この主人公は、師は1人って考えているけど、師は1人とは限らない。ある程度何人も、生きてる限り増えていくと思う。なるべく師をたくさん持って行けば、それで自分を作るっていう感じで、自分の・・・パズルですよ。そのパズルはいろんな人が入っていけるように考えて、反面教師だといってもその人も師として入れちゃう。自分の周りの人は自分とは違うから、その違うところも、もう、ほんと、師だっていう風に……。」

## 4. 自らの可能性を示してくれる支援者

研究参加者は1人のロールモデルを決めて思い続けることにはあまり理解を示さなかったが、自分に影響を与えた人物として、自らの可能性を示してくれた者や、その可能性を信じて支援してくれた者を挙げた。

「主人公みたいにそこまで常に考えているっていうほどじゃないんですけど、尊敬するっていうか、一応高校の頃の数学の先生。可能性を大切にしているっていうか、限界はないって聞いて。兄弟でT大学に行けなかったのは

その先生だけで、でも独学で勉強して数学の先生になっただけっていうのを聞いて。この先生のおかげで数学が好きになっただけ、先生自体も大好き。」

「心の師はいないっていうか、そういう風じゃなくて、中学の時に部活、何か知らないけど行かなくなった時に、先生が呼びに来たことがあって、来なくなったら来ればいいよって言ってずっと待っていてくれて」

「両親に自分のやりたいことをやれって言われてるんですよ。自分の行動には自分で責任をもてとか、全部自分だって言う、でも支えてくれる」

## IV. 考察

### 1. 学生はロールモデルをどのように捉えているか

学生は自分の職業を実体験から決めたと語り、実際に会ったことのないシュバイツァー博士をモデルとしている物語の主人公には理解を示していない。その理由として、実際に会ったことのない人は何倍にも良く考えることができ、1人の人に入り込みすぎてしまうと身近な人々から病気と思われてしまうと語っている。つまり、学生はロールモデルが実際に会ったことのない人物の場合には実体験を伴わず、身近な人々の理解が得られにくいと考えているようであり、反対に、実際に会ったことのある人物であっても、身近な人々に理解されなければロールモデルにはなり得ない。このことから、学生自らロールモデルを決めたとしても、学生の身近な人々が入り替われば、一度理解を得られたロールモデルであっても、再び理解を得なければならぬ事態になることが想定される。学生の身近な人々が学生の行動に理解を示した時の反応を、学生が実感することによって自らの行動を正しいと認識するという結果からも、学生の関心が身近な人々の理解を得ることに向けられており、その身近な人々の入れ替わりに敏感にならざるを得ないことがわかる。

さらに学生は、自分が進むべき道を導くのではなく、自分の可能性を求めするために選んだ道を承認し、その道を誤らないように支援してくれる人を尊敬する。しかしここでも学生はその支援行動を知覚し共感はあるが、同一化する対象とは見ていない。おそらく、このような実際に会ったことのある人物ではあっても、身近な人々から理解されるということがきわめて重要な要素となっていることが推察される。

反面教師ですらも「師」となりうるという発言にみられるとおり、ロールモデルは善悪どちらの行動も示す可能性がある。その示された行動の善悪は知

覚した学生が判断することになるが、善悪どちらの行動もパズルのように取り込むと語る学生にとっては、その行動を取り込む前に判断する善悪よりはむしろ、(ルールモデルの示した状況における) 良い、あるいは悪い行動というレパートリーを持つことで得られる、これから自分が起こす行動ないし思考の幅に重きを置いているとも考えられる。もう少し穿った見方をすると、今回グループ討議に参加した学生にとっての行動の善悪は、ルールモデルが示した行動によって決まるのではなく、学生自身が行動を起こした際の状況に応じて文脈的に決まるということ意識的にせよ無意識的にせよ感得している結果の発言なのかもしれない。

本研究の結果からは、学生にとってのルールモデルのひとつのありかたとして、同一化を試みる人物としてではなく、学生が未知の状況においてとる行動のレパートリーを取り込むために様々な行動を示す人物像が示されたと考える。

## 2. 学生の職業倫理の涵養にルールモデルは有効か

ルールモデルとして看護師がその行動を示し、その時点で学生が「良い行動」と判断したとしても、学生の関心が、身近な人々の理解を得ること、自分が未知の状況においてとる行動の善悪にあるとすれば、ルールモデルへの同一化は、むしろ学生が行動をとるべき状況において柔軟な対応を困難にするものと考えてもおかしくない。緒言で述べたように、職業倫理に対する意識が高まってきた背景に、専門職としてのアイデンティティの確立があるとされているが、学生がルールモデルへの同一化を試みないケースがあるという今回の結果は、学生の専門職アイデンティティの確立に、良いとされるルールモデルを示すことがはたして効果的かという疑問が生じる。職業倫理教育の目的は、専門職が自ら定めた倫理規則を、現実場面に実現できる行動力と判断力を養うことであり、特にルールモデルはケアリング行動に有効とされていた。たしかに、状況に応じた行動の選択の幅を広げるといえる意味ではルールモデルの効用はあると考えるが、ただ単にルールモデルが行動のレパートリーを拡げるための「行動サンプル」であるとするならば、いわゆるルールモデルである必要はなく、むしろ、初学者がさまざまな行動を目の当たりにできるような環境を整えることが本質的な教育支援と言えるかもしれない。

本研究が明らかにした学生の傾向は、あらかじめ

善悪を決めない (p.235)<sup>15</sup>という点で、状況倫理の考え方を彷彿とさせる。状況倫理とは、原理や規約を機械的に適用するのではなく、いまここで現に起こりつつあることとの関連で、何がふさわしい生き方を考えようとするものである (p.241)<sup>15</sup>。この状況倫理においては、倫理規則も、ルールモデルも、ケアリングもひとつの原理、規約と考えることも可能かもしれないのである。したがって、その原理や規約の代わりに、自分のおかれた状況の中で何がふさわしいかを、自ら相対的な世界の中に見出さなければならぬことになる (p.251)<sup>15</sup>。この考え方によれば、従来のルールモデルは、行動サンプルを示す以上の意味を持たない。重要なのは、あらかじめ目指すべき専門職像を伝えることによってアイデンティティを確立するのではなく、個々の学生が状況に合わせて再構築が可能であり、それ自体が看護職のアイデンティティであることを教育の中で伝えていくことであると言えるかもしれない。

以上、学生の捉えるルールモデルについて本研究データをもとに論述したが、本研究参加者は単一の看護系大学に所属する学生であり、看護系大学に在籍する学生のルールモデルに対する捉え方を遍く網羅したものではない。今後、現代の一般的な看護学生のルールモデルの捉え方を知るためには、現代の学生から得たデータを蓄積し、理論構築した上で実証的な調査を行う必要がある。しかし、従来のルールモデルの効用について学習者側の立場から論考を行ない、かかる理論の一部を構成する可能性のある事象を抽出した点に本研究の意義があると確信する。

## 謝辞

本研究は2008年度～2011年度日本学術振興会科学研究費「看護倫理教育のモデル構築と検証：実践場面の倫理的判断・対応の検討と国際比較から（研究代表者：小西恵美子）」の助成を得て行なったものである。本研究でご協力いただいた学生の皆様に感謝する。

## 文献

1. 生田久美子. 「わざ」から知る. 新装版. 東京：東京大学出版会；2007.
2. 塩野米松. 失われた手仕事の思想. 東京：中央公論新社；2008.
3. 佐々木秀美. 歴史にみるわが国の看護教育—その光と影—. 神奈川：青土社；2005.

4. 横田恵子. ソーシャルワーク領域における職業倫理教育—初学者に対する具体的な試みから—. 社会問題研究 2000; 50 (1) : 1-15.
5. 慶野遥香. 心理専門職の職業倫理の現状と展望. 東京大学大学院教育学研究科紀要 2008; 47: 221-229.
6. 日本看護協会. 看護者の倫理綱領 [インターネット]. 2003 [検索日2011年11月16日] ; 1-6. Available from: <http://www.nurse.or.jp/nursing/practice/rinri/pdf/rinri.pdf>
7. 金沢吉展. 心理臨床・カウンセリング学習者を対象とした職業倫理教育 その効果と参加者の感想内容の分析から. 心理臨床学研究 2002; 22 (2) : 180-191.
8. Gallagher A. 第16章 看護倫理の教育：倫理的能力の促進. In: Davis AJ, Tschudin V, de Raeve L. 2006 /小西恵美子, 和泉成子, 江藤裕之 2008. 看護倫理を教える・学ぶ 倫理教育の視点と方法, 東京, 日本看護協会出版会.
9. 文部科学省. 大学における看護実践能力の育成の充実に向けて—看護学教育のあり方に関する検討会報告 [インターネット]. 平成14年 3月26日 [検索日2011年9月6日] ; 1-46. Available from: <http://www.umin.ac.jp/kango/kyouiku/report.pdf>
10. Miller JF. Opportunities and Obstacles for Good Work in Nursing. Nursing Ethics 2006; 13(5): 471-487.
11. Perry RNB. Role modeling excellence in clinical nursing practice. Nurse education in practice 2009; 9(1): 36-44.
12. 太田美緒, 前田樹海. 文献に見るわが国の看護教育におけるロールモデルの概念. 長野県看護大学紀要 2009; 11 : 51-61.
13. Good Work Project Trustees. The GoodWork Project®: An Overview [Internet]. 2011 [cited 2011 Sep 12]. Available from: [http://www.goodworkproject.org/wp-content/uploads/2011/08/GW\\_Overview-08\\_11.pdf](http://www.goodworkproject.org/wp-content/uploads/2011/08/GW_Overview-08_11.pdf)
14. Hsieh H-F, Shannon SE. Three approaches to qualitative content analysis. Qualitative Health Research 2005; 15(9): 1277-88.
15. 小原信. 状況倫理の可能性. 東京：中央公論社； 1971.